

バトウミの出稼ぎグリア人

——一九〇五年革命期の労働運動と民族的要因——

伊藤 順 二

【要約】 西グルジアの石油積出港バトウミでは、スターリンの関与の下で死者十数名を出した一九〇二年三月のゼネストを契機に、攻撃的労働運動が展開する。ロシア社会民主労働党バトウミ委員会は、グルジアのグリア地方出身の出稼労働者を中心勢力として、○五年革命以前から「独裁的」権威を誇った。実質的テロル容認と、出稼ぎグリア人の同郷人集団の結束がその背景にあった。バクーのアルメニア人虐殺以来、ザカフカス全域で民族対立が重大化し、委員会もグリア人以外からは民族的偏りを従来以上に警戒される。しかし「グルジア人」としての民族的利害ゆえにグリア人は委員会を支持したわけではない。「マルクス主義的党派がグルジア人の民族的利害を吸収した」という通説は、むしろ同時代の他民族の目から見た限りで正当化される議論だったのである。

史林 八四巻四号 二〇〇一年七月

はじめに

ザカフカス（トランスコーカサス）の黒海沿岸に位置するグルジアは、帝政ロシア領内で最もメンシエヴィキ勢力が強かった地域である。西グルジアのグリア地方で一九〇二年に始まった農民運動は「マルクス主義者が指導した世界初の農民反乱」^①と評価されている。メンシエヴィキは農民の支持をも獲得し、民族主義的他党派を凌駕する勢力となり、一七年革

命後は赤軍侵攻までグルジア共和国の政権政党となった。

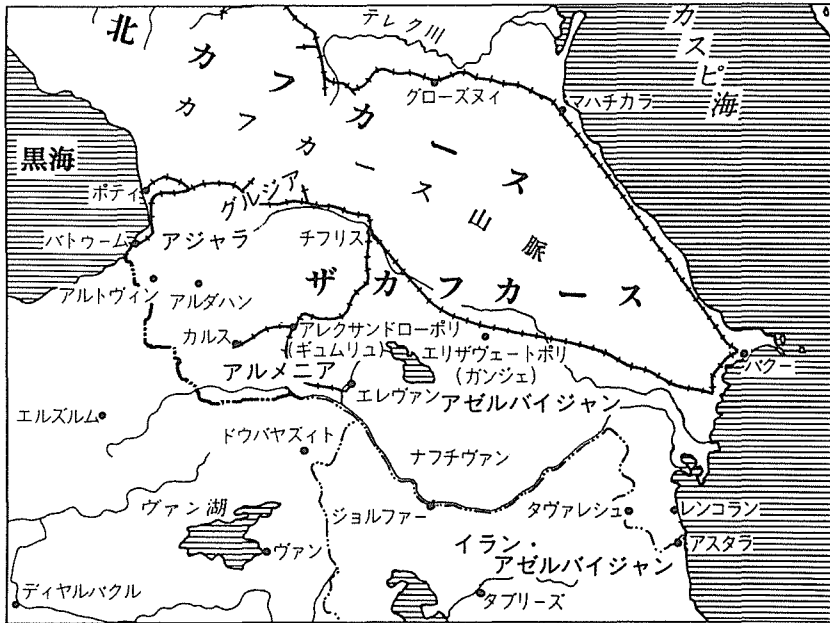
農民運動とマルクス主義的政治活動が接合された最初期の例としてグルジアは興味深い地域であるが、その実態・経緯の研究はそれほど進んでいない。グルジア本国での研究は、どちらかといえばボルシェヴィキが支持を得られなかったことに対する政論的釈明となる傾向が強かった。また、労働者・農民の「団結」を当然視し、一九〇五年の「血の日曜日」を運動史上の画期とするなど、図式的側面も強い。この傾向はペレストロイカ以降もあまり変わっていないようである。^②

一方で旧西側諸国の研究は、帝政ロシア領内の少数民族としての「グルジア人」を考察する視点が強かったと言える。そしてこの視点から、メンシェヴィキがグルジアで高い支持を獲得した背景についての定説的主張が繰り返されている。いわゆる「カフカスのユダヤ人」として商業活動に活躍したアルメニア人、政治的支配者だったロシア人に比べ、グルジア人は経済的にも政治的にも劣位にあった。反⇨商人的倫理観と反⇨専制の主張をもつマルクス主義者の活動は、このグルジア人にとっての「政治的武器」となった。つまり、マルクス主義の主張がグルジア人の民族的不満を吸収した、というのである。^③

また、ザカフカスの労働運動と民族というテーマに関する新しい研究としては、シューニーが著名である。彼はチフリスやバクーでの民族の出自と階層格差・賃金格差との相関を明らかにし、労働運動と民族問題との密接な連関を示している。^④しかしシューニーも、グルジア人とのメンシェヴィキの人氣、という問題に関しては、首府チフリス（トビリシ）の統計的状況を参照することで、先に述べた「民族的利益伏在論」ともいべきものを補強するに留まっている。^⑤

以上の状況を多少図式化していえば、旧ソ連の研究は階級的視点、西側の研究は民族という視点に立ってグルジア史を見ていたのである。筆者はシューニーの「階級と民族との重なり合い」という視点に共感しつつ、首都チフリスではなく農民運動の中心地である西グルジアの地域的状況を重視して研究を進めてきた。その過程で、ジュガシヴィリ（⇨若きスターリン）も労働運動に関与した石油積出港バトウミが浮上した。バトウミの流血のゼネストに参加し、生地グリア農村

地図 20世紀初頭のザカフカス



（山内昌之『神軍・緑軍・赤軍』筑摩書房，1988，見返し地図を改変）

に送還された出稼労働者は、農村での農民運動の発起人となっている。また民族構成が比較的等質な西グルジア農村と異なり、バトゥミは多民族都市だった。「民族」に関わる問題意識は、農村部では比較的稀薄だったとも言えるが、バトゥミは農村部とは異なる民族的・経済的・政治的状况にあつたのである。だとすれば、メンシエヴィキの支持拡大の契機を西グルジアの農民運動にみるとしても、その議論はバトゥミに対する研究で補完される必要があるであろう。

また筆者は、「階級」「民族」といった規定を同時代的言説のなかで捉える必要をも強く感じた。一九〇五年のザカフカスでは、二月にアゼルバイジャンの石油都市バクーで起こったアルメニア人虐殺事件を契機に、アルメニア人とムスリムとの衝突が各地で頻発する。民族対立の激化は、革命運動側からは政府や「反動勢力」による運動弾圧の手段として受け止められた。ゆえに、社民系組織は自らの運動の国際性（超民族性）を、以前にも増して強調することとなった。例えば、ギリヤ出身の著名な言語学者マルは、〇五年八月頃に

グリアを訪れ、非民族主義的側面を強調しつつ運動を賞賛している。「グリア人が民族問題・教会・民族教会に無関心であることは「……」彼らが今日、実際に、民族的世界観から果てしなく全人類的な理想へきっぱりと抜け出たこと、つまりキリスト教的理想を超越したことを示している。」^⑦「自らはグルジア人である演説者某は、自分をロシアの社会民主主義者と同一視したのみならず、グルジアのあらゆる民族主義的な要素を拒否した。」^⑧「現在彼らの間には分離主義的なものは全く見られないし、地方主義≡民族主義的なものさえない。」^⑨

こうした強調が戦略的なものであることは明らかである。民族衝突は「基本的傾向を特徴づけるもの」ではなく、他の民族間には友好的関係が保たれている^⑩、とマルは主張するが、この言説は民族問題の重大さを逆説的に暗示している。

しかも、先行研究は重視していないが、「民族的利益伏在論」も実は同時代から散見される議論だった。既に一九〇三年に、バトウミ駐留軍参謀本部のウーソフ中佐が、出稼ぎグルジア人の反政府活動を「分離主義のはげぐち」と形容している。^⑪○五年にザカフカスを訪れたイタリア人ジャーナリストのヴィツラーリも、革命運動への一部グルジア人貴族の支持に触れ、ナシヨナリストが運動の背後に示唆している^⑫。ここには、「少数民族の参加する政治活動イコール民族主義運動」という先入見が看取されるが、「労働者の国際性」を称揚しつつも、完全に超民族集団にはならなかった運動の実情を反映しているのかも知れない。いずれにしても同時代の運動への視点を参照する必要がある。

いずれにせよ、少なくとも一九〇五年以降、つまり民族衝突が本格化する時期において、「階級」を表面的主張、「民族」をその裏に隠れた欲望、と単純に図式化することは困難である。マルの言説の紹介から明らかなように、「民族」的原理はグルジア人活動家からすれば敢えて否定的に言及する必要があったのである。活動家が「民族」ではなく「階級」に固執したこと、またそれでもグルジア人主体の運動が民族的利益を伏在させるものとして受け取られたこと、を併せて考えなければならない。

本稿では多民族都市バトウミでの、一九〇五年年末までの「グルジア人」の労働運動を考察する。史料としては、警察

報告は諸史料集を使い、他にグルジア語日刊紙・週刊紙を使用した。社民系組織（ロシア社会民主労働党カフカス連盟）は「合法的なマルクス主義機関誌」として週刊『靴 *K'vatsi*』『旅人 *Mogazari*』を出している。非合法紙『闘争 *Brizolia*』なども一部復刻されている。^④ 日刊『イヴェリア *Iveria*』は政治的には保守派、日刊『情報紙葉 *Tsnobis Purtseli*』はエスエル（社会主義者＝革命家党）寄りであり、どちらも民族主義的傾向が強く、政府系史料と合わせて社民系各紙の党派性に対する補完となるであろう。また二〇年代に『革命史料 *Revolutsiis Matiane*』誌などで公表された各種回想も、比較的歪曲の少ない史料と言えよう。アルメニア語・ムスリム諸言語の史料は今回利用できなかった。

バトゥミは地図から明らかなように、オスマン帝国との国境附近に位置する。「グルジア人」は概ね正教を民族宗教とした。だが周辺農村部はアチャラ地方は宗教的に異なる状況下にあった。更に多民族都市として、多数のロシア人・アルメニア人・ムスリムが存在していた。ロシア人はグルジア人と同じ正教を信仰しているとも言えるが、言語系統や使用文字はまったく異なる。アルメニア人は独自の文字・言語と単性論に立つ独自の教会をもつ。また「グルジア人」自体が一枚岩ではなく、「ギリヤ人」「メグレリ人」などの地域的アイデンティティを下位区分としてもっていた。以下ではまず、アチャラ地方とバトゥミの人口構成を概観しよう。

- ① Shann, Teodor. *Russia, 1905-07; Revolution as a Moment of Truth*. London, 1986, pp. 103-107.
- ② Akhvediani, Khari'on. *1905-1907 is'tebis revolutsiis gomokhkhili Acharashi*. Batumi, 1987 (マチャラにおける一九〇五—一十七年革命の運動); Чарнишвили, С. Д. *Советы Грузии в трех революциях (1905-1907, 1917 гд), Тбилиси, 1987*. 参考文献。ヤブコバエバエバエ時代区分に限らず、Хачапурдзе, Г. В. "Революция 1905-1907 гг. в Грузии." *Исторический Записки* т. 11, с. 84-113; Чакашвили, И.

- A. Рабочее движение в Грузии (1850-1904гг.). Тбилиси, 1958; Тskv'it'aria, P'atman. *Acharashi revolutsiiri mozhraobis is'toris nark'itchebi* (1890-1914гг.). Batumi, 1959 (マチャラの革命運動史論集)。なお五〇年代後半の研究の方が柔軟である。近年では Комахидзе, Текмураз. *Вопросы истории образования и культуры города Батуми. (1897-1995 гг.)* (автореферат для института истории и этнографии им. Н. Джавახишвили.) Тбилиси, 1997. なお、専ら民族史的立場とした研究を出している。

③ 研究史については、拙稿「グルジアの知識人と農民運動——メンシェヴィキ「国民政党」化の起源——」『西洋史学』一九九九、第一九五号、一—二二頁、序文を参照。

④ Suny, Ronald Grigor, (ed.) *Transcaucasia, Nationalism, and Social Change: Essays in the History of Armenia, Azerbaijan, and Georgia*. Michigan Slavic Pubs, 1983. (rev. ed. 1996). Id. *The Making of Georgian Nation*. Indiana U. P., 1989. Id. *Looking toward Ararat: Armenia in Modern History*. Indiana U. P., 1993. Id. *The Revenge of the Past: Nationalism, Revolution, and the Collapse of the Soviet Union*. Stanford U. P. 1993. Id. (ed. with Geoff Eley) *Becoming National: A Reader*. London, 1996. Id. (ed. with M. D. Kennedy) *Intellectuals and the Articulation of the Nation*. Ann Arbor, 1999.

⑤ Suny, *The Making*, p. 145. Id. "Nationalism and Social Class in the Russian Revolution: the Cases of Baku and Tiflis." in *Transcaucasia*, pp. 241-260.

⑥ 民族衝突については、「とりあえず拙稿」一九〇五年バクーの労働運

動と民族衝突「史林」八〇巻三号、一九九七年、二九一—六一頁、を参照。

⑦ Март, Н. Я. *Из грузинских наблюдений и впечатлений*. СПб., 1905, c. 19.

⑧ Там же, с. 27.

⑨ Там же, с. 30.

⑩ Там же, с. 7.

⑪ Tsagarashvili, Sh. (ed.) "Mushata modgraoeba sakartveloshi 1905 ts'his revolutsiis ts'in." *Sakart'vo Moambe* [= *История Грузии*] 10 (1959), 86-1257 (一九〇五年革命以前のグルジアの労働運動): g. 157 (No. 79).

⑫ Villari, *Fire and Sword in the Caucasus*. London, 1906, pp. 56-57.

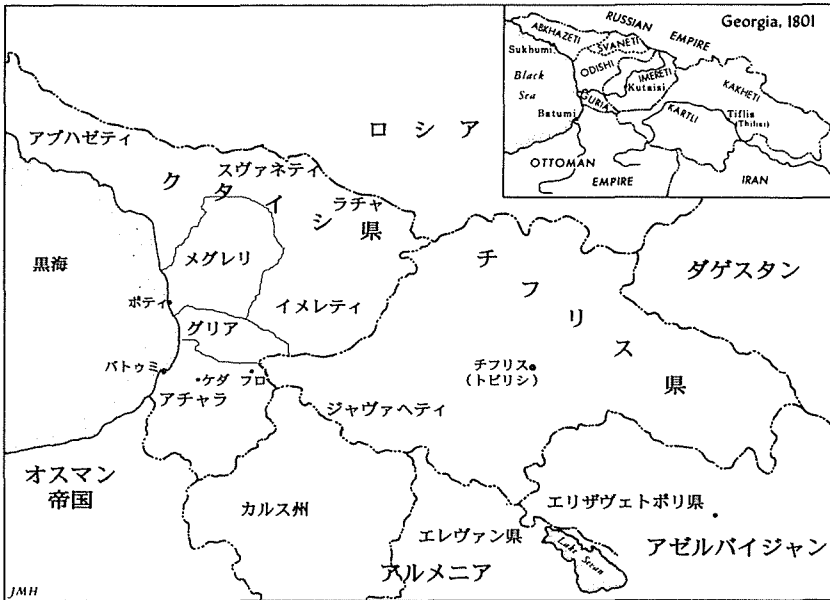
⑬ Sturua, D. G. da Jvania, G. K. (ed.) *Brdzola / Борьба* No. 1-4 1901/IX - 1902/XII. Tbilisi, 1988. 本文はロシア語翻訳付也。また "Proletariats Brdzolis Pirtseli" が一部 "Revolutsiis Matiane" 紙上 (1923 Nos.) で復刻されてゐる。

第一章 アチャラの併合

一 「ムスリムグルジア人」の農村

バトウミと周辺地域Ⅱアチャラ Ach'ara 地方(ロシア語ではアジャリア)が帝政ロシア領となつたのは一八七七一八年の露土戦争後のことである。①アチャラ住民の大多数Ⅱ「アチャラ人」はグルジア語南西部方言を話す、数世紀前からイスラム化し、ほとんどが正教徒だった他の「グルジア人」とは一線を画していた。その意味で、「アチャラ人」はグル

地図 20世紀初頭のグルジア



(R. G. Suny, *The Making of the Georgian Nation*. Stanford, 1988, p. 62. を改変)

ジア人の単なる下位区分ではなかった。一八九〇年代になっても、住民はマドラサ（ムスリムの学校）で書記言語・教育語としてトルコ語を習得しており、知識人もグルジア文字は書けなかった。家庭内では、特に女性は専らグルジア語を話していたが、トルコ語の語彙をより多く取り入れていたという。^②

一九世紀のグルジア人にとって、正教は既に「民族的宗教」だった。アチャラに近くムスリムのグルジア人が多かったジャヴァアヘティでは、以下のような観察が見られる。

ジャヴァアヘティのグルジア人住民の多くは、グルジア語や父祖の習慣・儀礼を忘れていくようだ。言語や慣習が墮落しているのみならず、グルジア存立の第一の基盤たるキリスト教信仰さえ捨て去ってしまっている村も、当郡には散見されるようだ。「……」当地の識者は、あらゆる手段を用いて、この同胞が幾らかでも正気を取り戻し、『自分は誰だったか、何だったのか』に思い当たるよう、尽力している。^③

アチャラに対しても同様の嘆きが観察されている。アチ

表1 バトウミ郡の民族構成(1897)(市を除く)

ロシア人	アルメニア人	グルジア人	ギリシャ人	「タタール」
1786	281	51404 うちムスリム 50637	1886	1611

出典：Кавказский Календарь на 1907, Тифлисъ, 1906, II отд., с. 95-99.

表2 バトウミ市の民族構成(1897)

ロシア人	アルメニア人	グルジア人	ギリシャ人	「タタール」
7144	6839	6086 うちムスリム 176	2764	2137

出典：Id

ヤラはムスリム支配によつて教会や言語が破壊され「三〇〇年間我々から引き離されていた兄弟」と表現されている^④。アチャラのムスリム化は数世紀間のムスリム支配に屈した「墮落」として表象されたのである。

併合後間もない八一年に、バトウミに最初の二級制学校が創立されている。これは七九年にチフリスで発足した「グルジア読み書き普及協会」の全面的援助によつて建てられた最初の例だった。協会は東グルジア・チフリス県を主要な活動領域としており、バトウミに対する関心の高さが窺える^⑤。また九四年正月には「グルジアの夕べ」がバトウミで開催され、以後恒例の新年祝賀行事となる^⑥。これは学校生徒による寸劇や合唱を中心とし、参加費は教育目的の寄付金となった。民族主義的傾向を持つ啓蒙知識人にとつて、アチャラ人の「再教育」＝同化は重要な課題だったのである。

しかし九七年の統計では、バトウミ郡農村部の識字率は男性八・〇%、女性一・一%に過ぎず、これは西グルジア・クタイシ県の平均と比較して顕著に低い^⑦。宗教的差異も保たれていた。表一に明らかのように、バトウミ郡農村部の住民は「ムスリムのグルジア人」で占められる。後にソ連邦下に「グルジア共和国」が成立したときも、アチャラは「アジャリア自治共和国」の地位を得ている。「民族」を共和国・自治共和国の設立基盤とする建前からすれば、これは「宗教」を分立の基盤とする点で異例のことである、との見方もあるが、スターリンの配慮があつたのだろう。アチャラの「グルジア」への帰属意識は比較的低かつたといえよう。

しかしこれは農村部の状況であり、バトウミ市では多少様相を異にする。

二 バトウミのグルジア人

バトウミは黒海沿岸の良港として、ロシア併合後急速に発展を遂げる。早くも併合五年後の一八八三年には、カスピ海沿岸のバクーと鉄道で結ばれている。バクーは当時世界最大の油田であり、バトウミは石油積出港として急成長した。七〇年代に約五千人だった人口は露土戦争で三千に減少するが、一九〇三年には三万五千に達していた。^⑧

これは、バトウミ住民の多くが移民や出稼労働者だったことを意味する。一八九七年の市の総人口は二八五一六人だが、その性比（女性一人あたり男性数）が二・五二という非常に不均衡なものであることも、住民の永住性の低さを傍証している。

しかも住民の多くは、周辺農村出身者ムスリムではなかった。表二に見られるように、住民の民族構成は、概ねロシア人・アルメニア人・グルジア人が三分している。この状況は、民族構成に限って言えば、シユーニーが「民族的利益伏在論」を再確認する根拠となったチフリスの状況と類似する。しかもこの「グルジア人」の大多数は、ムスリムではなく、グリアやイメレティなど西グルジア出身のキリスト教徒（グルジア人の下位区分としての「グリア人」・「イメレティ人」）だった。統計としては、「タタール」||トルコ系ムスリムに数えられた人々の間に、「ムスリムのグルジア人」とも言いうる人々が入っている可能性はあるが、それでもバトウミの「グルジア人」が周辺農村と全く異質な構成をとったことは明らかである。

さて、この多民族都市バトウミでグルジア人は、シユーニーのいうような「弱者」に相当しただろうか。ここでは市政について一瞥しよう。

バトウミに市政が敷かれたのは一八八八年である。市会議員にグルジア人が占める比率を見ると、八八―九四年の段階では三六名中一一名（肉ムスリムは四名）だが、九四―一八年には三五名中一九名と過半を占めている（ムスリムの比率は不

明)。市長もグルジア人貴族(アサティアニ、アンドロニカシヴィリ)が続いている。^⑩

一九〇三年六月に市筆頭職員 *президенты* 選挙が行われるが、これはグルジア人ジュルリ対ロシア人イヴァノフの選挙戦となった。興味深いことに、ムスリムを含めた非グルジア人^⑪「議会の少数派」はグルジア人代表に対抗して投票ポイコットを行っているが、再選挙の結果ジュルリが当選している。グルジア人貴族の移住が多かったことが窺える。少なくともバトウミ市のレヴェルでは、グルジア人は数的には三大民族中最も少数であるにもかかわらず、「政治的支配者^⑫ ロシア人」に対する「弱者」ではなかったと言える。

新興都市バトウミでは、「グルジア人」とは基本的に移住してきた正教徒たちだった。バトウミはアチャラ農村部の状況とは隔絶した多民族都市となっていたが、グルジア人の政治的位置は必ずしも低くはなかった。しかし農村部のアチャラ人、つまりムスリム化した「グルジア人」を啓蒙^⑬国民統合する運動は成功していない。

この状況のもとで、労働運動がグルジア人を主軸として展開する。

- ① ハトウミの概要は、とりあえず *Батумь и его окрестности. Къ 20-лѣтню причесовиненіи гор. Батумя къ Россійской Имперіи.* Баруць, 1906; Нену, J. D. *Baku: an Essential History.* London, 1905 (repr. by Arno Press, N. Y., 1977), pp. 219-231. を参照。
- ② Sakhokia, Tedo. *Mogzartobani: Guria, Ach'ara, Samizgadam, Aghkazi.* Batumi, 1985(旅行記): sg. 149-150.
- ③ *K'vazi* 1987, No. 16. Akhalkalaki 雜 *Varalei* 雑言。
- ④ Sakhokia, *Mogzartobani*, sg. 143-144. ただし著者サホキヤ自身は、今なへん^⑭アチャラの言語的距離^⑮をどう考へたかは同調してゐない。
- ⑤ Goderidge, L. (ed.) "Masalebi kartvela shoris ts'era-k'ikhvis gamatslebeli sazogadochis ist'oriavris (1879-1900)." *SM* 37-38 (1978), sg. 5-106(読々書々普及協会の沿革): sg. 10-11.
- ⑥ *Tsnobis Partsi* 1904. 1. 17 (No. 2381).
- ⑦ *Kaakaskiï Kalendary na 1907*, Tiflis', 1906, II отл., c. 329-332. 平均識字率は男性一七・一一%、女性九・一一%。
- ⑧ *Батумь и его окрестности*, c. 460-461.
- ⑨ *Какаскій Календарь на 1905*, Тифлисъ, 1904, III отл., c. 30-31.

第二章 労働運動の展開

一 一九〇二年のスターリンの「活躍」

一九〇一年まで、バトゥミには目立った労働運動は展開していない。商店員が日曜・祝日の休日化を要求する運動があり、一九〇〇年一月には市会でも議論されているが、急進的主張はない。^① 〇一年七月には印刷工房のストライキがあるが、小規模なまま労働者数名の解雇で終わっている。^②

転機となったのは、労働者の死者十数名を出した〇二年三月のストライキである。これにはジュガシヴィリ（スターリンの本名）が関わっており、それ故に「史実」の同定は難しいが、比較的歪曲が少ないと思われる（しかも引用されることの少ない）二〇年代のグルジア人の回想を主に経緯を叙述しよう。^③

グルジア語非合法紙『鬭争 *Braxola*』は、〇一年九月付で第一号が出ている。これが同年中にバトゥミに持ち込まれた。印刷工だったドウムバゼの回想によれば、チフリスから『鬭争』を携えて来訪したラサ・ムゲラゼが日曜日の印刷工仲間同の宴会に同行し、ワインの代金九ルーブリ七五カペイカを組織資金からのおごりにした。これが「最初の非合法職業組織の萌芽だった」という。^④ ただしそれ以前から、グリシャ・ソゴロフ（ソゴラシヴィリ）がマルクス主義サークルを作っていたし、「第三グループ」のチヘイゼ等を通じて非合法文書の流布は行われていた。チヘイゼは一七年革命期にペトログラード・ソヴェト議長となる人物だが、当時はバトゥミ市立病院に勤務していた。活動は学校教師など知識人が主体だったが、労働者街の日曜学校で労働者向け活動も行っている。日曜学校は司祭が主催していた。「マルクス主義者」の活動は一部宗教者にも支持を得ていたようだ。^⑤

ジュガシヴィリが、おそらくチフリスの委員会で糾弾・放逐された結果、バトウミを来訪したのは二月一〇日だったという。⑧ 彼が各工場の労働者を組織化したらしい。〇二年一月には新年祝賀の装いで、工場毎の労働者代表が集会を開いている。⑨ 同月二三日、ロートシルト工場の製材部で火事があり、鎮火に動員された労働者が鎮火協力の代償を求めて要求を出したのが、彼らの最初の労働運動だったという。⑩

二月二六日、ロートシルト工場が労働者三八九名を解雇すると告知した。⑪ これはブリキ缶入石油の需要減による操業縮小を意図したもので、古参労働者も多数含まれる大量解雇のため、労働部門・階層を越えて不満が広がったという。当時ジュガシヴィリは非合法印刷業務のためチフリスにいたが、急遽バトウミに戻って労働者に指示を下し、その結果運動は八時間労働日などの急進的要求を掲げるに至ったという。⑫ ただし警察側史料では八時間労働日への言及はなく、二八日の追加要求として、賃上げ・休み時間延長・無料診療所設置・ストライキ期間中の賃金半額支給が記録されている。⑬ いずれにしても運動は単なる大量解雇抗議を超えた要求を掲げることになる。ストライキの続く中、三月六日に三三名の労働者が逮捕される。これが大量逮捕と死亡の引き金となった。⑭

三月七日、一群の労働者が「釈放か、さもなければ我々全てを逮捕せよ」と要求してバトウミの監獄に詰め寄る。監獄側では、牢の空きがないので鉄道沿いの兵営への移動を要求した。労働者側は既に逮捕された三三名と共に移動させよ、と応じ、結果として逮捕者の護送に労働者群が随行し、三五〇名近くが兵舎に収容された。

同日夕刻、活動家ドウムバゼとドリリアがジュガシヴィリから檄文の印刷を提案されている。器機不足のため、活字字母に直接カーボン紙を重ねる方法で即席のピラが刷られたという。⑮ 同日夜から翌早朝にかけ、このピラが散布され、ゼネスト挙行が宣伝される。

翌三月八日、兵舎を包囲した（おそらく他の工場の）労働者が前日と同じく「釈放か逮捕か」を要求し、収容されていた労働者もこれに呼応して兵舎の門をこじ開けた。その結果軍隊が発砲し、一三名が即死、後に五名が死亡する惨劇となる。

一三日から、逮捕労働者五―六百人が生村へ強制送還され、三ヶ月の帰還禁止措置を受けている。四月五日にはジュガシヴィリも逮捕された。^⑭

スマスは、この惨事がジュガシヴィリの「流血への強迫観念」のために引き起こされたとする。惨事後、ジュガシヴィリはバトゥミの労働者からも白眼視されたため、逮捕はむしろ都合だったという。^⑮二〇年代の回想録にも反スターリン的言説は見られえず、バトゥミの活動家達のジュガシヴィリへの評価は計りかねる。しかしこの事件が、それまでの運動とは異なる無謀なまでの攻撃性を持っていたことは認められる。

だがたとえジュガシヴィリへの評価が否定的だったとしても、この事件自体はその後の労働運動の展開に強い影響を及ぼした。比喩的に言えば、バトゥミの労働者にとって「血の日曜日」は既に一九〇二年に起こっていたのである。以後、労働運動はその暴力性と要求の急進性を強めていく。次節では労働運動＝革命運動の組織と活動をみる。

二 「真のバトゥミの統治者」

一九〇五年初夏にバトゥミを訪れたヴィツラーリは、革命運動の強大さに驚愕している。

街路で殺人が起きずに済む日はなく、殺人者が捕まることもなかった。テロリストの委員会が郊外に存在し、それはどの党派にも属しないのだが、社会主義者とエスエルの双方に多少の連絡があった。人材は人間の層どもから登用され、暗殺による支配を強化していた。バトゥミ郊外の、最も無秩序な分子が数多く起臥する場所に、公式のロシア人知事が「真のバトゥミの統治者」と表現した男がいた。その権威は相当のもので、彼の言葉は法律のごとく守られた。テロリストの行動様式は極めて簡単だ。突然、あれこれの工場の労働者はストライキすべしと命令が出される。人々は文句なく従い、運動を止めようとする経営者や従業員は暗殺される。^⑯

この状況は少なくとも前年には成立していたようだ。職業革命家トラトウタも、一九〇四年晩夏にロシア本土からバトウミに派遣され、その「全ロシア的状况の中では完全に例外的な」活動に衝撃を受けている。グリアは「共和国」状態を謳歌し、バトウミでも労働者街には警察の手は及ばない。前節で言及した古參の活動家グリシャ・ソゴロフが、ヴィツラーリのいわゆる「真のバトウミの統治者」だった。

彼「ソゴロフ」は事実上、一人でバトウミとグリアの委員会の化身となっていた。警察署長や司祭や地主の中で誰が「除去 *чужа*」されるべきかを彼自身が決定したのだ。彼がグリアの各々の共同体での経済的問題を仲裁し、同じく彼が党全体の路線を指示し、彼は事実上の独裁者であり、際限のない信頼と権力を享受していた。

この「独裁」体制にスターリンの陰翳をみるのはアナクロニズムだろう。グルジア人活動家の回想には、何らかの外的・内的検閲が作用しているのかも知れないが、ソゴロフへの個人崇拜的態度は見られない。また少なくとも農民運動の間では、ソゴロフの名は全く知られていない。グリア委員会創設者の一人で、後にメンシエヴィキとして亡命したウラタゼの回想にもソゴロフへの言及はない。ウラタゼの文章は検閲下に書かれたものではないので、少なくとも農民運動へのソゴロフの影響は限定的なものだったと結論できる。しかしともかく、バトウミ委員会は早くから実質上の権力を獲得しており、それは外部から「独裁」と形容されるような統制力を持っていたのである。

この組織の位置について考えてみたい。バトウミの活動家がロシア社会民主労働党カフカス連盟の下位組織として正式に「バトウミ委員会」を形成するのは一九〇三年三月以降のことである。〇三年七月のロシア社会民主労働党第二回党大会で党は分裂するが、しかし事実上、分裂の影響はバトウミ委員会には及ばなかった。トラトウタによれば、党の分裂を知るものは「最上層の五—一〇人だけ」だったという。彼自身は、少なくとも〇四年後半まで委員会はボルシェヴィキだったと主張する。逆にジゲンティは、党大会の報告後、ソゴロフ等三名を除いて全ての委員がメンシエヴィキ側についたとする。これは必ずしも矛盾ではない。要するに、組織としてのバトウミ委員会自体は、外部との連絡や人員のり

クルートにもかかわらず、ボルシェヴィキ／メンシェヴィキの対立の圏外にあった。○五年になると、四月付けのピラに
対立の徴候が見え、五月八日のメーデー代替集会でもこの問題が取り上げられている。^⑤しかし委員会が完全に分裂するこ
とはなかった。

活動家トラトウタは、バトゥミでは党の教義教育を「文字通りイロハから」始めなければならなかった、と回想してい
る。彼は○四年末にバクーへ赴くが、そこで「既に党派闘争が広範な大衆自身を捉えている」状況を眼にし、必ずしもボ
ルシェヴィキが優位を占めていたわけではないにも関わらず、「真のプロレタリア運動」がバクーにはあったと賞賛して
いる。^⑥裏を返せば、バトゥミ委員会は党中央の教義・規範に従うという意味では「真の」社会民主労働党の組織ではなか
ったと言いたげである。ジャーナリストのヴィツラーリが委員会を「どの党派にも属しない」としているのも、そこに起
因するのだろう。

組織の実態について見よう。委員会中枢に「管理委員会」は大衆組織から超越していた。委員は逮捕・異動で増減が激
しいが一〇―二〇数名を超えず、加入は容易ではなかった。官憲の調査^⑦では、管理委員会は労働者には存在自体を知らさ
れておらず、合言葉などの頻用のため諜報も困難だったという。だとすればソゴロフの知名度の低さは当然なのかも知れ
ない。一般労働者にとっては、一〇名毎に作られる細胞の代表から成る「実行委員会」がバトゥミ委員会の本体だった。
管理委員会は実行委員の罷免権を有し、諮問・連絡・勧告・指令という形で運動を統制していた。

この組織は暴力性の強さによって特徴的だった。テロルの頻発がそれを示唆する。

三月の事件直後に、ロートシルトの作業監督 приказчик が狙撃されている。○三年六月二日にもマンタシエフ工場
の作業監督が襲撃によって致死傷を負った。^⑧労働運動側は作業監督を抱き込む形で進み、運動に反対する監督やスト破り
の労働者は、路上襲撃や自宅への威嚇発砲という形で脅迫もしくは殺傷されることが多かったという。^⑨労働者を悪罵した
作業監督の解雇要求が出されることもあった。^⑩逆に、遡って九〇年代には、非合法活動への関与容疑で逮捕されている作

業監督の例も見られる。^⑪

○三年六月二二日には、○二年六月のストライキでの和解斡旋者だった貴族レヴァン・グリエリが狙撃された。^⑫ 彼は○五年一月九日の再度の狙撃で殺害されている。グリエリはその姓が示すように、グリア地方の支配的貴族の家系だが、葬儀に際して暗黙のボイコットのため遺体を護送する馬車が見つからず、警官が護送を代行した。その警官から遺体を安置した礼拝堂に至るまでもが、農民の忌避の対象となったという。^⑬ グリエリの名は民衆詩でも運動の敵対者として歌われている。^⑭

○四年には囚人護送馬車が襲撃される事件も起きている。^⑮ その他、運動の関与は不明だが盗賊（義賊？）による略奪事件も多い。市の治安状況はかなり劣悪だったようで、○三年七月にはバトゥミ軍管区は隣接するアルトヴィン軍管区と併せてバトゥミ州となり、同時にバトゥミ市に戒厳令が導入される。^⑯ しかし効果は薄かったようだ。

○五年三月には、「反動的」とされていた日刊『黒海報知 Черноморский Вестник』が印刷工から印刷をボイコットされ、更に二七日には編集部を襲撃されて編集長更迭と路線変更を強いられている。^⑰ 同月には一司祭が襲撃されている。^⑱ これらのテロルは必ずしも委員会の「独裁」的指令の結果では無かったのかもしれない。クバラゼはグリエリ殺害者三名・協力者二名の名を明記し、彼らの独断の行動であって委員会では無かったことを強調している。^⑲ 実際テロルは公式には、エスエル系の活動と一線を画す必要もあつて非合法紙の論調でも戦術として否定されていた。^⑳ しかし本節冒頭の回想から考えれば、バトゥミ委員会はテロルを実質上黙認していたと考えられよう。また運動参加者が独断で行つた「自然発生的」テロルも、外部の眼には委員会の行使する暴力として映つたのだろう。

委員会の指令による暗殺の事例もクバラゼは挙げている。ドブルジャンスキー二等大尉は、○五年当時からアルメニア人民族組織（ダシナクツチュン）の脅迫を受けているが、数年後にバトゥミ委員会の決定で暗殺されたという。^㉑ 一〇月には、武装蜂起への情勢を受けて、委員会は「活動的、犯罪的警察関係者の排除」を決定し、警察署長・分署長・巡査・憲兵な

ど十名近くが死傷している。^⑫

運動は増給やボーナス支給などの経済的成果を挙げた。強硬な態度をとる政府に対して、企業側は多くの場合全面的に譲歩している。特に外資系企業は労働運動への「理解」の度が強かったようで、警察関係者はフランス系外資ロートシルトの「共和主義的」態度に苦言を呈している。具体例を挙げると、ストライキ期間中の賃金支給という要求を充足させることに對して当局側は難色を示し、企業側も表面上は不払いの態度をとったが、実質的には「補助金」の名目で支給していた、という。^⑬ 同じく外資系企業の多い石油都市バクーで、メーデー祝賀に企業主が比較的寛容だったことも想起される。運動側の暴力的脅迫も一因だが、石油関連企業への不況の影響が比較的軽微だったことも原因だろう。

バトゥミは一九〇二年に、ジュガシヴィリ（スターリン）の関与の下で決定的な流血の事件を経験した。その記憶は、以後のバトゥミの労働運動を「全ロシア的状况の中では完全に例外的な」ものとしてゆく。バトゥミ委員会の「独裁」とも称される高い権威と統制力の主要武器の一つには、テロルがあった。○五年革命後にギリヤ農村で「義賊」（暗殺・盗賊行為を行う反政府的存在）となる人々の多くが、バトゥミでの労働運動を経験していることも、運動の暴力性の強さを示唆する。^⑭

しかしこの運動の結束力・統制力は、テロルと石油産業の特質のみで説明できるのだろうか。多民族都市バトゥミの労働運動は、必ずしも民族的に不偏なものではなかった。次章ではそれを見よう。

① Kruti, 1900. 12. 3 (No. 49).

② Dumbadze, Lado. "Chemi mogonebani batomshi revolutsionuri mushaobis shesakheb 1901-1902 ts'is'." *Revolutsiis Martane* [=*Где-то* RMJ] 1926, No. 1(14), gg. 88-96 (「バトゥミ革命運動の回想」); g. 89.

③ 三〇年代に史料・論文集 *Вспышкиаа демонстрация 1902 года*.

Москва, 1937. が出ているが、出版年を考慮して本稿では使用しなかった。

④ 「闘争」の発刊経緯については、とりあえず Ehyknae, A. C.

- “История организации и работы негетальных типографий Р.С.Д.П. на Кавказе за время от 1900 по 1906 год.” *Пролетарская Революция* 2(14), 1923, с. 108-165. *参照。
- ⑤ Dumbadze, “Chem i mogonebani”, g. 89.
- ⑥ Zghent'i, Tengiz. “Batumi 1901-1905 ts'lebshi.” *RM* 1928, No. 3 (20), gg. 91-133; g. 93. 筆者未見だが、Sogholsashvili, Grisha. “Mogonebani.” *RM* 1925, No. 2 (12) *参照。 「第三グループ Mesame dasi」としてソルジア語合法週刊誌『鞆 K'vchi』を主な活動舞台としていた初期のソルジア人マルクス主義者を指す。尾川創一「ソルジア・メンシエヴィズムの形成」『西洋史学論集』三三三号、一九五五年、一一〇頁を参照。グループ創設者の一人である作家ニコヴァリは、ニコヴァリクの出稼ぎ経験があり、ニコヴァリの労働者や早くから関係を持つ。P. Atch'adze, Nest'or. *Egnat'e Ninoshvili Batumshi*, Tbilisi, 1959.
- ⑦ Smith, Edward Ellis. *The Young Stalin: the early years of an elusive revolutionay*. London, 1968, pp. 81-109. スミスは「スターリン＝内務省保安部のスパイ」説及びその主張に合わせるための一部牽強付会な記述には疑問があるが、それを差し引けばこの著書は同時期のスターリンに関する研究としては概ね客観的なものと言える。またボリス・ニコヴァーリン『スターリン：ホルンシェヴァキ党概史』教育社、一九八九（原著一九三五）七巻九号の時期について詳し。
- ⑧ Zghent'i, “Batumi”, g. 94.
- ⑨ *Id.*, g. 96.
- ⑩ *Id.* g. 95-96. 火葬について *Iveria* 1903. 1. 26, 28 (No. 21, 22). *参照。
- ⑪ Tsagareishvili(ed.), g. 74 (No. 42).
- ⑫ Zghent'i, “Batumi”, g. 97.
- ⑬ Tsagareishvili(ed.), gg. 74-80 (No. 42).
- ⑭ 以下に記述する Zghent'i, “Batumi”, gg. 97-9; *Рабочее движение в России в 1901-1904гг. сборник документов* [= *РДР*]. Ленинград, 1975, с. 132-133 (No. 51) *249。
- ⑮ Dumbadze, “Chem i mogonebani”, gg. 90-91.
- ⑯ Tsagareishvili(ed.), gg. 52-53 (No. 20).
- ⑰ Smith, *The Young Stalin*, pp. 101-102.
- ⑱ Villari, *Fire and Sword*, p. 53.
- ⑲ Тарагула, В. “Канун революции 1905 года на Кавказе.” *Пролетарская Революция*, 1926, No. 1(48), с. 210-216; с. 212. *24 Tsagareishvili (ed.), g. 243 (No. 119); 1905 ts'vhi. *Bark'adebi Batumshi (mogonebata k'vchil)*. Batumi, 1925 (ニコヴァリのリターン (回覧集)), g. 12. *参照。
- ⑳ 研究者が“剛”側を代表する著大蔵の *Sakartvelos ist'oria nar-k'vchebi*. T'omi V I. Tbilisi, 1972 (バルナバ党論集)。このコントロークの語は、55。また *Id.* T'omi V. Tbilisi, 1970. 二一九九〇年代の活動家についての言及は、59 (g. 733)。
- ㉑ Уртадзе, Григорий. *Воспоминания грузинского социал-демократа*. (Gregory Urtadze. *Reminiscence of a Georgian Social Democrat*). Stanford, California, 1968.
- ㉒ Zghent'i, “Batumi”, g. 115.
- ㉓ Тарагула, “Канун революции”, с. 213.
- ㉔ Там же: Zghent'i, “Batumi 1901-1905 ts'lebshi”, g. 115-116.
- ㉕ *Диспоки Кавказского Союза РСДРП 1903-1905 гг.* [= *РДР*-ДКС] М., 1955, с. 327-329 (No. 150) ; 1905 ts'vhi, gg. 22-23.

- ②⑧ Таругута, "Канчн революцини", с. 215.
- ②⑨ Tsagareishvili(ed.), gg. 237-248 (No. 119).
- ③⑩ Tsnobis Putseli, 1903. 6. 26 (No. 2192).
- ③⑪ Tsagareishvili(ed.), gg. 243-244 (No. 119).
- ③⑫ *Id.*, gg. 93-94 (No. 47).
- ③⑬ Zhghenti, "Batumi", gg. 94-95. ローシルト工場。
- ③⑭ Tsnobis Putseli, 1903. 6. 26 (No. 2192). 民族系新聞では「ギリヤ人は調停者としてのみ賞賛せられたる」。Iveria, 1902. 6. 28 (No. 135).
- ③⑮ 1905 *Is'vi*, gg. 9-10; Zhghenti, "Batumi", g. 123.
- ③⑯ Karuli khalkhuri p'oezia. Tomi XI: Istorit'i lakebi. Tbilisi, 1984 (トルニアの民衆詩), gg. 135-136.
- ③⑰ Tsagareishvili(ed.), gg. 220-221 (No. 109).
- ③⑱ *Id.*, gg. 101-102 (No. 52); PDP c. 133-137 (No. 52).
- ③⑲ 1905 *Is'vi*, gg. 18; 72-74. 編集部への示威行進は一九〇三年三月一日にも行われた。Tsagareishvili(ed.), g. 100 (No. 50).
- ③⑳ Каказ, 1905. 3. 9. (No. 64).
- ㉑ 1905 *Is'vi*, gg. 9-10.
- ㉒ Brdzola, gg. 84-85.
- ㉓ 1905 *Is'vi*, g. 14.
- ㉔ *Id.*, g. 43.
- ㉕ Tsagareishvili(ed.), g. 244 (No. 119).
- ㉖ *Id.*, g. 185 (No. 79). 「秘密裡の妥協」と言う表現が Brdzola, g. 85. に見られる。
- ㉗ 拙稿「一九〇五年バクー」五二頁。世紀初頭には、石油輸出货量はやや頭打ちになるが、一九〇五年八月の民族衝突と放火による大損害まで大幅な減少などは経験してゐない。輸出货量・石油価格などの推移は Thompson, Arthur] Beely. *The Oil Fields of Russia and the Russian Petroleum Industry* (2nd ed.), London, 1908, pp. 5, 29-30. の表が詳しい。
- ㉘ 拙稿「ロシアの義賊現象と農民運動」「ロシア史研究」六八号、二〇〇一年五月、一四一—一五六頁。

第三章 労働運動と民族対立

一 出稼ぎギリヤ人とアルメニア人

石油積出港バトゥミには不熟練港湾労働者が数多く存在した。またブリキ缶製造・石油のパッケージングなどを行う工場も存在した。雇用百名以上の大規模工場は五つあり、いずれも石油関連企業である（表三を参照）。ローシルトはフランス系外資、マンタシェフとハチャトゥリヤンツはアルメニア系、シデリデイスはギリシャ系である。

アルメニア系資本は同族を優先雇用すると言われることが多いが、表を見る限りマンタシェフはその限りではない。これはグルジア人側の努力の成果のようだ。

グルジア人労働者は、工場でもバトウミ港でも職が見つかるので、皆マンタシェフに感謝している。／グルジア人とアルメニア人・タタール労働者との間には、反目・諍いが最近頻繁にあった。個別的な被雇用者や作業監督としては、アルメニア人とタタールのみが採用されており、グルジア人は近寄ることもできなかったからだ。しかし最近では大部分の船荷作業でグルジア人が増加している。そして徐々に労働経験を重ね、港湾労働で必然的に優位に立つようになり、そして今日では、全グルジア労働者の先頭に組合が立ち、皆に仕事を見つけている。組合はグルジア人・アルメニア人・ロシア人・オスマン人などの身分に関わらず、日雇労働者を請け負っている。^①

これは一九〇三年の状況である。記事では組合の民族的な公平さが強調されているが、「全グルジア労働者の先頭に立つ」との表現から明らかなように、組合はグルジア人が多数派だった。また、この「グルジア人」の過半はグリアア地方出身だったと思われる。

「反目・諍い」は前年末に起こっている。〇二年一月二十九日、グルジア人・ロシア人失業者（無職者）と、アルメニア人港湾労働者三百人との間に衝突があった。投石合戦・威嚇発砲があり、ナイフで二名に軽傷を負わせた一グルジア人が逮捕されている。一二月七日・一日にも衝突は再発し、あわせて六名が軽傷を負った。^②

労働運動先鋭化とまさに同時期に、このような衝突が発生していることは興味深い。アルメニア人は政治党派的に、他民族と比較的隔絶していた。オスマン帝国領内のアルメニア人の「解放」を掲げるアルメニア革命家連合「ダシナクツチン」が、ザカフカス各地でオスマン領内の武装闘争のために資金と人材徴収を行っており、反ロシアの活動は活発ではなかった。^③ ゆえに、この衝突の背景に、単に雇用差別だけではなく党派的反感もがあった可能性は否定できない。ただし、衝突直後の一四日、ロシア人のスト破り労働者がクリミアから導入されると、直ちに地元労働者対新規参入労働者、とい

表3 バトゥミの主要工場(100人以上)の従業員の民族構成（1903）（％）

	総数	グルジア	アルメニア	トルコ系	ロシア	その他
ロートシルト	1500	76	5	6	8	
マンタシェフ第1	1098	30	65	—	3	
マンタシェフ第2	644	57	34	—	4	グリア出身36
ハチャトゥリヤンツ	466	5	86	—	2	ムスリム 6
シデリデイス	323	10	34	25	1	ギリシャ30

出典：Tsagareishvili, Sh.(ed.) "Mushata modzraoba sakartveloshi 1905 ts'lis revolutsiis ts'in." *Saist'orio Moambe* 10(1959), gg. 1-257: g. 245 (No. 119).

・マンタシェフ第2工場の「グリア出身」の比率は、「グルジア人」の内数。

う対立軸が形成されている^④。アルメニア人との対立を過大視すべきではない。

それでも運動への最も攻撃的な参加者がグルジア人だったことは明らかである。発端となった〇二年三月のストライキでも、「主要な参加者と指導者は全て例外なく、グリア人・イメレティ人・グルジア人だった^⑤」と観察されている。グルジア人労働者が殴打や脅迫によってストライキを全労働者に強制しており、「地元グルジア人の掃討が怖いので労働できない」という、ロシア人やムスリムの労働者の訴えも散見される^⑥。〇三年七月に各地で起こった「南ロシアゼネスト」にはバトゥミも参加しているが、商店や馬車御者、またトルコ国籍の出稼労働者は専ら脅迫によってゼネスト参加を強いられている^⑦。

もちろんストライキへの積極的参加者がグルジア人だけだったわけではない。ある企業主は「グルジア人労働者は病原菌だ」と言った^⑧というが、この言葉は他民族の労働運動への参加が必ずしも否定的なものではないことを示している。実際、参加者・逮捕者の内には、ロシア人・トルコ国籍・ペルシャ国籍の者も多く見いだされる。しかしバトゥミ委員会傘下の労働運動がグルジア人、特にグリア人を最大の構成要素としたことは、多くの観察者の確認するところであろう。

この民族的な偏りは、特にアルメニア人たちの不信感を産んだ。「闘争」には興味深い衝突例が示されている。マンタシェフ第二工場製材部門の労働者はほとんどアルメニア人だったが、そこでアルメニア人作業監督が同族の労働者を殴打した。他部門の労働者が抗議してこの監督を解雇させた。しかし、グルジア語非合法紙の表現によれ

ば、「アルメニア人労働者は、労働者全体の利益に完全に無自覚であることを顕わにし、『これはアルメニア人内部の問題だから、決定権もアルメニア人にある』との考えから、グルジア人労働者が介入するのを許さなかった」。彼らは反対に作業監督復職を要求してストライキを起こし、殴られた労働者も自分の非を主張したという。^⑩

多くの観察者が挙げる、アルメニア人の結束の固さと閉鎖性をここに見るべきかもしれない。殴打への抗議は、単にグルジア人側の誤解から始まった不幸な「おせっかい」だったのかもしれない。だが前章で見たように、作業監督の多くがグルジア人主導の労働運動に抱き込まれつつあった状況に対し、アルメニア人が警戒感を抱いたことも了解されよう。

ただし、この対立軸は○三年以後は弱まったようである。この年の七月に、アルメニア人と帝政ロシアとの比較的良好だった関係が、アルメニア教会資産収用令によつて決定的に崩される。これ以降ダシナクツチュンはロシア領内でのテロ活動を活性化させる。^⑪警察側史料によれば、バトウミ委員会は○四年にはダシナクツチュンと「合意に達し」、協力が、少なくとも相互の活動黙認の協定を結んだらしい。^⑫

一方でバトウミ委員会もアルメニア人への宣伝不足を痛感していた。委員会の高位関係者にアルメニア人名は管見の限りでは見あたらない。^⑬また委員会名義のピラで「ロシア語・グルジア語・アルメニア語」の三方国語で出されたものは、管見では○五年四月のものが最初である。^⑭しかしともかくも宣伝の努力はあった。マルによれば、グリア農村ではアルメニア人が殆ど存在しないにもかかわらず、赤旗にはアルメニア語でもスローガンが記されていたという。^⑮民族平等を掲げたピラも散見される。^⑯

○四年九月三日にはバトウミ委員会のアルメニア人活動家、アヴェティク・タミアンツが殺されているが、グルジア語の非合法紙はこれをアルメニア人革命組織「フンチャク（警鐘）」の仕業と断定している。タミアンツはもとフンチャクに属しており、バトウミ委員会に転向したのみならず、同族の労働者に宣伝も行つたので、フンチャクに裏切り者として暗殺されたというのである。^⑰フンチャクは前述のダシナクツチュンとは別組織であり、不和と暗殺は可能性として

あり得ないことではない。アルメニア人組織とバトゥミ委員会との微妙な関係が窺える挿話である。

グルジア人とアルメニア人のコミュニケーションは主にロシア語でなされていたと思われるが、グルジア人による言語習得の試みもあった。挿話的になるがもう一人の逸話を挙げよう。バトゥミで非合法出版活動に携わったドウムバゼは、〇三年年初にソゴロフからアルメニア語学習を命ぜられている。彼はあるグルジア語ピラに独断でロシア語四行詩を挿入するなど、超民族的活動に早くから興味を示していた。（ただし、四行詩は文法・表現が滅茶苦茶だったためか、印刷を命じたケツホヴェリが読んで笑い転げてしまい、ピラは作り直させられたという。グルジア人印刷工でも、厳密に「正しいロシア語」を書くことは困難だったようだ。）しかしアルメニア語習得後、彼はバクーへ派遣される。総じてロシア人・グルジア人以外の人材に乏しいザカフカスの社会民主労働党組織では、多言語を操る人材は帝政ロシア最大の非合法印刷所を擁するバクーへ吸収される傾向にあった。

出稼ぎギリヤ人の一部は〇二年三月の惨劇後、生地ギリヤに送還され農民運動の発起人となった。また前章でのタラトウタからの引用に示されるように、ギリヤ委員会の本部が少なくとも形式上はバトゥミに存在したことは、ギリヤとバトゥミとの連携の強さを窺わせる。実際、例えば惨劇の一周年にあたる〇三年三月のストライキでは、バトゥミ委員会がギリヤ農民に向け、バトゥミ来訪と運動参加を煽動したという。バトゥミの労働運動は超民族的活動を目指してはいたが、特に民族主義的組織をもつアルメニア人とは対立する局面も多かった。委員会は民族的公平を掲げつつ、人材的には出稼ぎギリヤ人を主要な参加者としていた。

一般に出稼労働者は同郷人集団を形成する傾向にある。本章冒頭の港湾労働者の組合もギリヤ人の同郷人集団的なものだったのだろう。その社会的結合とバトゥミ委員会が、ある程度まで重複したのである。

また、「グルジア人Ⅱ劣位」という図式がここでも成り立たないことに注目しておこう。グルジア人の所有する大規模

工場がないという意味では、彼らはアルメニア人に比べ「劣位」だったかも知れない。労働階層と民族の相関を示すデータが無いことも悔やまれる。しかし外資系企業ロートシルトの存在のために、アルメニア人の経済的優位の印象は和らげられたであろう。また雇用面においてもグルジア人は、攻撃的労働運動のなかでアルメニア人に拮抗する地位を確保したのである。

二 ポティの出稼ぎグルジア人とメグレリ人

マルは西グルジアの民族対立の事例として、ポティでの事件を挙げている。マル自身はその重要性を否定しているし、地理的にもアチャラ地方から多少ズれる。しかし、ここではグルジア人同郷人集団が、更に閉鎖的な形で発展している。また西グルジアの「グルジア」民族の状況をイメージするためにも、この節で事件を一瞥しておくことは有益だろう。

まず「メグレリ人」なるものについて説明しなければならない。

メグレリ人はメグレリ地方(サメグレロ)の住民である。メグレリ語はグルジア語・スヴァン語・ラズ語と共にコーカサス諸語カルトヴェリ語群に属するが、類縁性を持つとはいえず、「グルジア方言」などとは異なり、グルジア語とは別言語として位置づけられている。ただし歴史的経緯もあり「グルジア」からの分離の動きは(少なくとも一九九〇年代まで)見られない。その意味では「グルジア人」同様にグルジア人の下位区分と位置づけても差し支えないが、言語的隔たりが比較的大きいことは留意すべきだろう。

グルジア人からの個人的伝聞によれば、メグレリ人とグルジア人は一種の地域的ライヴァル関係にあるという。実際、当時から「グルジア人对メグレリ人」の対抗球技会で双方が愛郷心を発揚させている例が見られる。また、グルジアではメグレリ人の評判は芳しくなかった。悪評の一因は「働き過ぎ」にあるが、家畜泥棒の容疑者としてもメグレリ人遊牧者に嫌疑がかけられたという。メグレリ人遊牧者は毎夏グルジア・アチャラを訪れるのだが、メグレリ人⇨家畜泥棒というステレオ

タイプはアチャラにも流布していた。^{②⑦}

ポティはメグレリ地方の港で、鉄道も通じており、グルジアの第二の港となっていた。港湾労働者としてはギリヤ人が活躍している。彼らはバトゥミと同様に組合を形成し、一八九七年頃には「タートル」に代わって港湾荷役作業を仕切るようになったという。^{②⑧}

一九〇五年五月一五日、ギリヤ人労働者をメグレリ人が襲撃した。同年一月のゼネスト後、ギリヤ人労働者が職を独占し、引替えに三百人余りのメグレリ人が排除されてしまう。二月に民族差別解消を要求して交渉するが成果はなく、代表の一人からは悪罵された。^{②⑨}これがメグレリ人の敵対感を煽ったという。事件詳細は不明だが死者などはなかったようだ。

この事件はバトゥミでの活動家の演説を契機として新聞紙上に取り上げられることとなる。五月二六日、委員会創立以来のメンバーであるギリヤ人チヒクヴィシヴィリが、街頭演説で事件に言及した。彼はメグレリ人労働者がパリのグルジア人ナシヨナリストに煽動されており、結果的に政府の民族離間策に荷担していると主張し、「民族自治打倒！彼らと戦おう！」と締めくくったという。

民族主義的知識人のサホキアがこれを聞き咎めた。彼は日刊『情報紙葉』で演説を要約した後、「そのような人物がいるとすれば、全ての自治論者にとっての恥辱である。その裏切り者の名を是非教えていただきたい」と、暗に主張の正当性に疑問を投げかけている。^{③①}その後『情報紙葉』編集部にはチヒクヴィシヴィリを弾劾する二連の投書が届き、紙面で紹介されている。うち一通は差出人を「ポティの労働者三百人の弁護人」と題し、三〇名の連署があった。いずれの投書も「自治論者の煽動」の存在を否定している。^{③②}

ギリヤ在任のチヒクヴィシヴィリも、同紙に反論を送る（掲載はされず紹介のみに終わったが）とともに、社民系の週刊『旅人』に回答を寄せ、「自治論者の煽動」という主張は保ちつつ、「公表の危険性」から論争は望まない、としている。^{③③}翌週の号にも無署名の糾弾記事が掲載されている。メグレリ人の出稼ぎが増加したのは不況の深刻化した〇四年からであ

り、既得権を形成していたギリシア人に対して供給過剰になったため、不満が募り「黒百人組」に利用されたのだ、と説明するとともに、組合は既にメグレリ人の加入権も認めていた、と釈明している。^④ 双方とも調停裁判所での裁定を望んでいるが、おそらく「自治論者の煽動」はギリシア人側の創出した幻影であろう。チヒクヴィシヴィリ自身、二月の交渉時に労働請負人がメグレリ人を罵倒したことが衝突の一因になったことは認めている。

当時既に農村部向けの「イメレティイメグレリ委員会」が活発に活動しており、社民系組織はメグレリ人をも手中に収めつつあった。^⑤ 管見の限りでは公然たる衝突はこの事件以外にはない。だが「グルジア人」「労働者」といった表象が微妙な位置にあったことを、事件は見事に示している。民族主義系・社民系紙の論調がいずれも、この事件の公開は「必ずしも望ましくない」としているのは興味深い。運動主体をグルジア「民族」とするにせよ、労働者「階級」とするにせよ、この事件は運動内部の亀裂を示すものだった。

西グルジアの革命運動は、実質的にギリシア人主導で進んだ。しかし運動は「労働運動」として表象され、ギリシア人の主観としても「全ロシアの運動」との一体感は強く保たれていた。またそれゆえに、ギリシア人の行動は、他の民族集団にとって独善的なものとなる場合も多かった。しかしそれは必ずしも「グルジア人」としての行動ではない。ロシア人・アルメニア人の眼には「グルジア人」だとしても、メグレリ人の眼には「ギリシア人」だったのだ。単純に労働運動が「グルジア人」の民族的欲望を吸収したとは言えないのである。

① *Iveria*, 1903, 5, 18 (No. 105).

② Tsagareishvili(ed.), *gg.*, 88-89 (No. 46).

③ Ter Minassian, *Anahide*, "Nationalisme et socialisme dans le mouvement révolutionnaire arménien (1887-1912)" in: *Transcaucasia*

(1st. ed. 1983), pp. 141-186. (九六年の改訂版では英訳)

④ Tsagareishvili(ed.), *gg.*, 88-89 (No. 46).

⑤ *PIIP*, c. 132-133 (No. 51). 東グルジアのイメレティ地方などの住民は帝國統計など「グルジア人」(自称はカルトリ)とは別民族と

して扱われていた。同じではやうな用語法が出ている。

- ⑥ *PDP*, c. 133-137 (No. 53). 1905 *is'ed*, gg. 75-76 (No. 42) 等を参照。
Id., g. 73.
- ⑦ Tsagareishvili(ed.), gg. 151-154 (No. 79).
- ⑧ 例を引く *Id.*, g. 96 (No. 47) を参照。
- ⑨ *Brzdola*, 91-92.
- ⑩ Ter Minassian, "Nationalisme et", p. 165 ff.
- ⑪ Tsagareishvili(ed.), gg. 241-242 (No. 119).
- ⑫ *Id.* は「十人組（細胞）の代表以上の地位に在るアルメニア人は」を示す語である。
- ⑬ *JKC*, c. 327-329 (No. 150).
- ⑭ *Март, Из зурпикских*, c. 28.
- ⑮ 例を引く *JKC*, c. 143-145 (No. 62). ムスリム系ピニアトニオウルのタバコ工場でのアルメニア人とグルジア人の「覚醒した労働者」二七名の解雇に対する抗議。これにはムスリム系労働者の「未覚醒」が暗示されている。
- ⑯ "Prolet'ariats' brdolis putseili No. 12-13 (1904. 10. 1.)." *RM*, 1923. No. 5, gg. 334-335; gg. 354-355.
- ⑰ Dumbadze, "Chem'i mogonebani", gg. 94-96.
- ⑱ Урагаче, *Воспоминания*, c. 20-22.
- ⑳ Tsagareishvili(ed.), g. 103 (No. 53). *Искра*, 1903. 5. 15 (No. 40)

も参照。

- ㉑ 他の事例として、ノウオロシスクでのギリヤ移民について *K'zuli* 1897, No. 5, を「また次節を参照」。
- ㉒ *Март, Из зурпикских*, c. 8.
- ㉓ 行政区分上はゼナキ郡とメグアイディ郡。自称はマルグレリ、ロシア語・英語などの慣用ではキングレリアだが、とりあえずグルジア語に準拠する。
- ㉔ 言語区分は *Языки мара. Кавказские языки*. Москва, 1999. に従った。
- ㉕ *K'zuli*, 1897, No. 20.
- ㉖ *Iveria*, 1901.2.20 (No. 34). *Supra* 参照。
- ㉗ Sakhok'ia, *Могачагобани*, gg. 148-149.
- ㉘ *K'zuli*, 1897, No. 27.
- ㉙ *Tsnobis Partsi*, 1905. 6. 9. (No. 2839).
- ㉚ エスエル寄りの「グルジア社会主義者＝連邦主義者党」を指す。尼川創一「前掲論文を参照」。
- ㉛ *Tsnobis Partsi*, 1905. 6. 1. (No. 2833).
- ㉜ *Tsnobis Partsi*, 1905. 6. 9. (No. 2839).
- ㉝ *Могачаги*, 1905. 6. 12 (No. 22). *Chokhat'auri* 参照。
- ㉞ *Могачаги*, 1905. 6. 19 (No. 23).
- ㉟ Урагаче, *Воспоминания*, c. 42, 58.

第四章 民族衝突の回避：アチャラ人との和解

一九〇五年二月六日から八日にかけて、バクーで警察の民族離間煽動の結果、ムスリムによるアルメニア人虐殺が起こり、

双方の死者三〇〇名以上を記録する。これ以後アルメニア人とムスリムとは相互に敵意を増幅させつつザカフカス各地で衝突を繰返す^①。バクーではトルコ系ムスリム（アゼルバイジャン人）の敵意の対象は専らアルメニア人に向けられていたが、キリスト教徒全体に敵意を拡大する言説も散見されたようだ^②。また例えばチフリスでは反ユダヤ的風潮と結合し、一月には市内の主要なアルメニア人とユダヤ人の家に白墨で印が付けられる、という事件が起きている^③。

バトウミではムスリムと他民族との虐殺^④衝突は起こっていない。だがキリスト教徒のムスリムへの恐怖は色濃く感じられる。社民系知識人はムスリムを「啓蒙が進んでおらず、反動勢力に利用されやすい、狂信的」集団と見ていた^④。おそらく風俗習慣の差異もあって、「マルクス主義者」のムスリムへの宣伝活動はキリスト教徒に比べ後れていた。バトウミ・グリアの委員会は共に、〇五年までアチャラで目立った活動を行っていない。

だがアチャラの農民は最終的には革命運動に参加し、キリスト教徒優位の運動の敵対者にはならなかった。以下、主にグリア人の回想に依拠することとなるが、「和解」の過程を見ていきたい。

バクーの民族衝突が警察の煽動の結果であることは当時から公然の秘密だった。バクーでもチフリスでも虐殺犠牲者の追悼集会は当局への抗議集会と化している。バトウミでも、二月二〇日にアルメニア教会境内と路上で大集会が開かれ、軍・警察との衝突で死傷者を出している^⑤。興味深いことに、集会で率先して警察と衝突したのは主にグルジア人労働者だったらしい。死者五名のうち四名、負傷者七名のうち五名、また逮捕者一五名のうち一二名がグルジア人の名をもつことが確認される^⑥。グルジア人の記録のためアルメニア人死傷者に対する記述漏れがあるのかも知れないが、バトウミ委員会にとってもアルメニア人虐殺が「反動勢力の煽動」として抗議すべき事件だったことは確かである。アルメニア人の民族的主義的革命組織ダシナクツチュンも、この時の軍隊発砲の首謀者とされたドブルジャンスキーに脅迫文書を届けている^⑦。

同様の衝突は六月五日にも起こっている。この日、ナヒチェヴァンでの民族衝突発生がバトウミにもたらされた。

日曜日で、市の庭園では軍楽隊が演奏中だった。若者たちが哀悼のための軍楽停止を要求するが受け入れられず、記録ではロシア人一名が逮捕、グルジア人二名が重傷を負っている。^⑤ 民族衝突に対して運動側は、いささか過敏とも思える反応を示していたのである。

一方、二月にはアチャラ農村でも動きがある。郡庁所在地ケダに二千名の武装した農民が集まり、政府諸機関を占拠し、皇帝の肖像を破壊したという。これは一月以来の出稼労働者の宣伝活動の成果だった。しかしこの集会は有力地主ジェマル・ベク・ヒムシアシヴィリの説得で収まっている。ジェマル・ベクは一八世紀以来のアチャラの支配的家の末裔で、アチャラ農村の間に高い権威を有していた。アチャラ農民への宣伝活動は、西グルジア他地域ほどの成功を収めてはいなかったのである。

五月にはアチャラで民族衝突の萌芽的事件が起こる。五月一日、アチャラの村が盗賊に略奪され、モツラー・メド・エフェンディ・グルチーオウリザードが殺害された。殺害者はグルジア人かアルメニア人と宣伝された。上アチャラの有力ベク等が集会を開き、バトゥミ市に三日以内の犯人引渡しを要求し、「さもなければ全キリスト教徒を襲撃する」と脅迫した。^⑥ 敵意の対象がアルメニア人に限定されていないことに注目されたい。グルジア人義賊テロリスト集団が暗殺行為で活躍していたことは、アチャラにも伝わっていたのだろう。革命前にはキリスト教徒への敵対感が比較的薄いことを考えれば、バクーの事件の影響の大きさが窺える。事件に対してはクタイシ県とバトゥミ州の代表、そして「全てのグルジア人高位ムスリム」が調停に乗り出し、集会は混乱無く解散したという。当局自体は中立の立場を保ったが、ジェマル・ベクが対立を煽ったらしい。^⑦

七月には「ムスリム兄弟よ！」と題されたピラが出回る。

数年も前から、我々の隣人たるアルメニア人・グルジア人が、反政府的人間に唆されて国家体制転覆を指向し、この思想によって団結し、消えつつあるムスリムへの敵意を再燃させ始めている。バクー・エリザヴェトポリ県・エレヴァン近郊などでもそうだ。

彼らは全く罪のないムスリムを愚弄し、その名誉と良心を辱めている。同時に彼らは、その背信的赤色言辭と偽善的活動でムスリムを破滅の深淵に導いているのだ。

奥付は「ムスリム組織」となっているが、革命への反対者によって書かれたものだろう。バトウミ委員会も対抗ビラを流布させるが、文面は雑誌からの引用だった。^⑭

委員会は一〇月一六日にはグルジア語ビラ「アチャラたちよ！」を出している。

諸君が自らの同胞を虐殺し、その後警察が以前同様諸君に君臨することになるだろう。果たしてその結果、諸君とその家族に何らかの利益があるだろうか？兄弟の血にまみれたパン切れが果たして人間を益するだろうか？否、同志よ、嘘つき警官たちを信用してはならない。諸君の兄弟の側、諸君と同様に貧しき人々の側に立て。^⑮

この言説はアチャラ人を「警官に唆された虐殺者」と安易に同一視しているが、五月の事件やザカフカス全域の状況を考えれば、委員会の警戒心は理解できる。既に八月には、バクーでは二度目の民族衝突で運動と石油産業が大打撃を蒙っているのである。

しかし和解への動きもアチャラ人の側から始まった。

九月末、グリアに二人のアチャラ人が訪れ、ジェマル・ベクとテムル・ベク某との土地係争の仲介を依頼する。グリア農村では難色も示されるが、結局ムゲラゼ等数名がアチャラのゴルジョミ村へ派遣された。深夜に村に着いたムゲラゼは翌早朝の村の第一印象をこう語っている。

我々が新たに発見したのは、グリア人がアチャラ人を恐れるように、アチャラ人も我々を恐れているということだった。我々の姿を認めると、怯えた口調で遠くから「あんなたちはグリアの暴徒たち *brutals* ではないか！」と問うてきたのだ。しかし、我々はこれこれこういう者だから、そんな考えは捨ててくれ、と安心させると、「アラーに感謝！それなら安心したよ」と言うのだった。^⑯

相互の警戒心は相当な程度にまで達していたようだ。ギリヤ人とアチャラ人が相互に「他者」同士だったことを示す、興味深い回想である。

九月二十九日、ムゲラゼ等はフロ村で「上アチャラ全域の貴顕」に取り巻かれる中、民族対立煽動者とされたジェマルⅡベクその人と会見する。ジェマルⅡベクの方から「和解」が話題にのぼったようで、むしろこれが会見の本題となった。彼は自らの長子二名を人質として委ね、金銭・食料・弾薬・武器の援助を申し出ている。

ジェマルⅡベクは最後に条件として「ただし、ギリヤ人が私を殺さぬ限りにおいて。私は命が惜しい。だがこのように行動すれば、私が九人目の兄弟だと分かるだろう」と発言したという。ギリヤ人による暗殺を想定していることから、彼に対する運動側の攻撃的煽動が類推される。彼は運動の隆盛状況を見て、生き残る道と思われたものを選んだのである。翌三〇日はムスリムの休日たる金曜日だったが、モスクで大集会が行われ、アチャラからギリヤへの援助と、ギリヤ人によるアチャラの治安維持が約束された。

同じく秋頃に、バトゥミ在住の有力ベク、アスランⅡベク・アバシゼもバトゥミ委員会に協力を申し出ている。彼は革命敗北後はオスマン帝国に逃亡したという。^⑧

その後間もない〇六年年初には、バトゥミとギリヤの運動は懲罰軍侵攻によってその力を失う。そのためアチャラ人とギリヤ人との「和解」の程度を測ることは難しい。しかしともかくも、アチャラ地方においては虐殺Ⅱ衝突は回避されたのである。

アチャラ人とギリヤ人との対立は、ザカフカス全域の民族衝突の影響を受け、ジェマルⅡベクによって「創られた」ものだった。テロルをも武器とする社民系委員会の攻撃的活動は、異教徒アチャラ人には特に脅威と映ったのだろう。ジェマルⅡベクを転向させたのは、ギリヤ委員会の成功と権力だった。しかし逆に委員会側から見れば、出稼労働者の宣伝活

動もあつたにせよ、最終的にムスリムの権威を運動に取り込む戦略を受け入れざるをえなかったことに、アチャラと他地域との断絶が窺われる。人質の申し出・交換条件としての「治安維持」などには、委員会がマフィア的な権威と行動様式を纏っていたこと、もしくは少なくともアチャラ人からそう見られていたことを示しており興味深い。

しかしここには、ムスリムへの断絶感があつたとしても「墮落したグルジア人」の統合というレトリックは全く見られない。「兄弟」と言うレトリックは使われているが、それは「労働者・農民」という階級関係を想定した「兄弟」だった。

① 拙稿「一九〇五年バクー」を参照。

② Чапхушьян, Гр. Армянские вопросы и армянские проблемы в России. Ростов-на-Дону, 1905. アルメニア人のパンフレットなので誇張があるかも知れない。

③ Meglian, Leon Der. *Tyflis during the Russian Revolution of 1905*. Ph. D. disser. Univ. of California, 1968, pp. 183-189.

④ Урадзе, Воспоминания, с. 25-27.

⑤ Zhghenti, "Batumi", gg. 120-121; Революция 1905 года в Закавказьи (Хроника событий, документы и материалы). Тифлис, 1926, с. 31.

⑥ 1905 *Is'ehi*, gg. 12-13.

⑦ *Id.*, g. 14, 第二章第三節で言及した人物。

⑧ *Id.*, gg. 22, 58.

⑨ *Id.*, g. 82; Akhveliani, 1905-1907 *Is'ehis revolutsiis*, gg. 48-51. ㄸ

ムシアシウヰリ家については Sakhokia, *Mogzavrobani*, gg. 184-191. を参照。

⑩ 1905 *Is'ehi*, gg. 24-25.

⑪ Sakhokia, *Mogzavrobani*.

⑫ 1905 *Is'ehi*, gg. 24-25.

⑬ *Id.*, gg. 25-27.

⑭ *Id.*, gg. 27-31. "Гагаам (連戦)" からの抜粋。

⑮ *Id.*, gg. 41-42.

⑯ *Id.*, g. 63.

⑰ *Id.*, g. 63.

⑱ *Id.*, gg. 56, 61. このアスラン・ベク・アバシゼの兄弟メメド・アバシゼは現在のアチャラの支配者アスラン・アバシゼの祖先であり、そのため歴史叙述上も過大に評価されることが多い。例えば Akhveliani, 1905-1907 *Is'ehis revolutsiis*, gg. 59-63.

おわりに

こう論ずることができるかも知れない。メグレリヤアチャラがグリア・バトウシの運動と和解したとすれば、その後

には「グルジア人」という同族意識が働いていたからであり、西グルジアにおける革命運動の隆盛は民族的等質性に起因しているのだ、と。実際ジョーンズは等質性を西グルジアの農民運動隆盛の一因に挙げている。^①確かに言語的コミュニケーションの領域においては等質性は重要な意味を持っている。アチャラ人はグリア人と概ね問題なく意志疎通できたが、それは例えば東グルジア東部に混住する「グルジア人」とアゼルバイジャン系ムスリムとの間には望みえないものだった。しかしその比較的等質な西グルジアにおいても、「グルジア人」なる枠組自体が所与のものでなかったことは本稿で充分証明されただろう。敢えて言えば、運動主体は民族集団的には「グリア人」に最も近かった。メグレリ人、アチャラ人との関係に示されるように、「民族」（グルジア人）という原理は集団形成の原理としては使用されなかった。また、グルジア人がアルメニア人・ロシア人に比して劣位にあったという図式も、バトゥミには認められない。市政的にも、労働者の地位という点でも、グルジア人はむしろマジョリティの立場にあった。運動の背後に民族的不満を仮定する必要はないのである。

しかし、「はじめに」で見たように、同時期から「民族的利益伏在論」が現れていることを考えなければならない。グリア人を中心とする社会民主労働党バトゥミ委員会の活動は、他民族（主にアルメニア人・ロシア人）からは「グルジア人の活動」と見られた。その結束力の強さと攻撃的活動は、非グルジア人や外部の眼にとってしばしば脅威に映ったのである。実際上も、バトゥミ委員会には出稼ぎグリア人の同郷人集団の性格が強く、その結果必然的にグリア人への身最厚も見られることとなった。更に、言うまでもないことだが言語的差異も大きな障壁として機能した。それゆえに、バトゥミ委員会が、ひいては「グルジア人」が労働運動の「独裁者」と見られることとなったのだ。ただしバトゥミ委員会が完全に閉鎖的なグリア人組織だったわけではない。運動はアルメニア人虐殺への抗議などにも示されるように、ある程度は超民族的側面も見せている。

「民族的利益伏在論」が専ら「グルジア人」に対して他民族が抱いた図式だったとすれば、グルジア人活動家の側に対

応する図式を看取することもできる。民族対立・民族衝突を通じてムスリム（とアルメニア人）が「反革命の道具」として使われた、という図式が、当時の社民系知識人の基本的認識だった。つまり、民族主義的運動の裏に政治的（階級的）策動がある、という論理である。この論理を単純に転倒すれば、「マルクス主義的」政治運動の裏に民族の利害があった、というものになる。だがどちらも、結果的に利用された、という意味ではある程度正しいとしても、実際の運動過程に即して成り立つ議論ではない。

「民族」と「階級」という二つの「想像の共同体」は、どちらも単なるレトリックとして片づけられるものではないが、同時にどちらも安易な本質化が危険な概念である。単純に一方の裏面に「真の意図」として他方を見るのではなく、双方を問題化することが必要だろう。その意味で、グルジア人の「首府」チフリスの労働運動の状況も再考の余地があると思われる。またアルメニア人やムスリムの活動との比較も、同時期のザカフカスの政治運動、ひいては異文化間の対話と対立を考える上で不可欠の研究課題となろう。これらは今後の課題としたい。

① Jones, Stephen Francis. "Marxism and Peasant Revolt in the Russian Empire: The Case of the Gurian Republic." *Slavic and East European Review* vol. 67, No. 3 (Jul. 1989), pp. 403-434, p. 415.

*本稿は平成一三年度文部省科学研究費補助金（特別研究員三九六二）を使用した成果の一部である。

（日本学術振興会特別研究員

The Gurian Seasonal Workers in Batoum : Labor Movement and Ethnic Factors in 1905 Revolution

by

ITO Junji

Georgia was peculiar in Tsarist Russia in that, though most Georgians are peasants, the Marxist party Menshevik was so powerful that it became Georgian “national party”. The starting point of Menshevik hegemony was the peasant movement in western Georgia, especially Guria province. Gurian peasant movement was tightly connected with the labor movement of Batoum (Batumi), the oil port of neighboring Achara province, through migrant workers.

Achara province was annexed by Tsarist Russia from the Ottoman empire in 1878. Acharans in village were Georgian in language, but Muslim in religion, in contrast that other “Georgians” were orthodox. So Gurian (=Georgian) workers, which had become the main part of migrant workers in Batoum, had little ties with Acharan peasants.

In Batoum aggressive labor movement flourished, especially after the general strike (March 1902), which took place under the engagement of Stalin and witnessed over 15 workers killed. This strike also caused the send-back of hundreds of Gurian migrant workers, who became one of the initiators of Gurian peasant movement. Henceforth the Batoum committee of the Russian Social Democratic Workers’ Party enjoyed high authority and powers over the Batoum workers, which was sometimes seen as even “dictatorial” before and during 1905 revolution. The main participants of the committee were Gurian migrant workers. The main weapons were terrorism, which was seen *de facto* tactics of the committee, and the provincial ties of Gurian workers.

The Armenian massacre in Baku (February 1905) had increased the influence of ethnic problematics in Transcaucasia. The committee was also seen as ethnically impartial in the eyes of non-Georgians. In fact, Armenian workers and Georgian workers had conflicted several times before 1905. The ethnic interests of “Georgians”, however, did not cause the authority of the committee among Gurians. In Poti, a neighboring port of Batoum, Gurian workers and Mingrelian workers conflicted, both of which were seen as sub-units of “Georgians”. Moreover, Acharans, or “Muslim Georgians” generally stood in opposition to

revolutionary movements, which were mainly taken part in by Gurians and other Christians. The menace of the massacre was at last taken over, when an Acharan influential bek compromised to the committee, seeing its substantial power. The committee also took actions to Armenians, who had a strong nationalist-revolutionary organisation.

Therefore, the Batoum committee can be said to have been *de facto* Gurian organisation, not Georgian, though it insisted on its internationalism. We need not to overlap Georgian national interests to the hegemony of the Batoum committee. The commonly accepted theory has supposed that Marxism overlapped the Georgian national interests. But this theory rather reflects the non-Georgian view in that era. The ethnic factors, as well as class factors, should not be seen as “the hidden essential determinant”.

The Lineage of the Imperial Throne in the Heian Period : In Connection with the Hereditary Treasures of Emperors

by

OKAMURA Sachiko

In the Heian period, the Imperial throne was succeeded not only by the son, but by the Emperor's brother or his cousin, so the lineage of the Imperial throne was complicated. The purpose of this study is to investigate how the emperor evaluated his own lineage, and how the complicated lineage was systematized. And in order to investigate these themes, the author considers how the hereditary treasures of emperors were transferred, because these treasures generally bestowed the authority of the throne.

The author shows that the system of preservation and management of the treasures changed in the period of the Emperor Uda (宇多) and Daigo (醍醐), because they recognized the value of the treasures as the symbols of the authority. The lineage changed when the Emperor Yozei (陽成) abdicated the throne to the Emperor Koko (光孝), father of Uda, so they needed a different authority from that of the former lineage.

The two lineages were symbolically unified by offering the Dai-Shoji (大床子), which was one of the hereditary treasures of the emperor, from Yozei to the Emperor Suzaku (朱雀), the son of Daigo. In consequence, the lineage